

# 青森県におけるりんご販売の現況と課題

山 崎 直 樹

## 1. はじめに

青森県におけるりんごの流通・販売を巡る全体的な状況は、①市場外流通の急増による国内の流通システムの大きな変化、②消費者の低価格志向と、景気回復の遅れによる法人需要の低迷、③若年層を中心とした果実離れの進行、④円高等を背景とした外国産りんご及びりんご果汁の輸入急増などの要因によって、引き続き厳しい環境が続くものと思われる。そこで、本論文では、今後大きな課題になると予想される外国産りんご及びりんご果汁の輸入状況を取り上げ、青森県の平成7年産りんごの生産と販売の状況とを見ることにより、りんごの販売と加工（果汁）についての課題と対策を考察することを目的とする。

研究方法としては、青森県農林部りんご課が作成したりんご流通対策要項とその資料を基に本論文を作成した。本論文では、はじめに青森県の平成7年産りんごの生産と販売について述べ、次に、外国産りんご及びりんご果汁の輸入状況と課題を考察し、最後にこれらについてまとめをすることにする。

## 2. 青森県の平成7年産りんごの生産と販売の状況

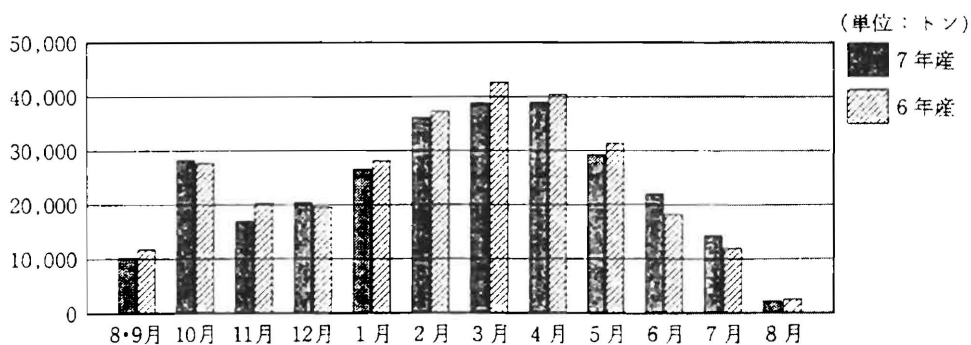
本章では、青森県の平成7年産りんごの生産と販売の状況を過去のものと比較し、現在の状況を把握することを目的とする。

7年産りんごの収穫量は、前年の干ばつによる開花量のバラツキから主力のふじ・ジョナゴールドでは着果量が平年を下回ったが、果実肥大が平年並みからやや上回る程度だったことから、最終的には481,300 tと前年をやや下回る（前年比95%）収穫量となった。

7年産りんごの産地取引価格は、消費地市場価格が低迷していることもあって、低調なままで推移した。品種別価格は、つがるは入荷増によりやや下回り、ふじが前年並であったが、その他は前年を大きく下回った。産地取引平均価格は、キロ当たり160円で前年比91%、前3カ年比94%となった。

7年産りんごの県外出荷量は、前年を7,659 t下回る284,572 t（前年比97%）となった。時期別の出荷量は、年内が75,921 t（同96%）、1～3月は101,627 t（同94%）、4月以降は107,024 t（同102%）となった。年内は産地間リレーが乱れたこともあり、価格が不振で出荷量が少なかったことから後半に多く出荷された（図1）。

7年産りんごの市場価格は、早生種のつがるから低調で、中盤以降も他県産りんごの出荷量が前年よりも多かったため振るわず、2月まで伸び悩んだ。3～4月には一時回復したものの、その後



平成8年産りんご流通対策要項より（以下同）

図1. 月別出荷数量

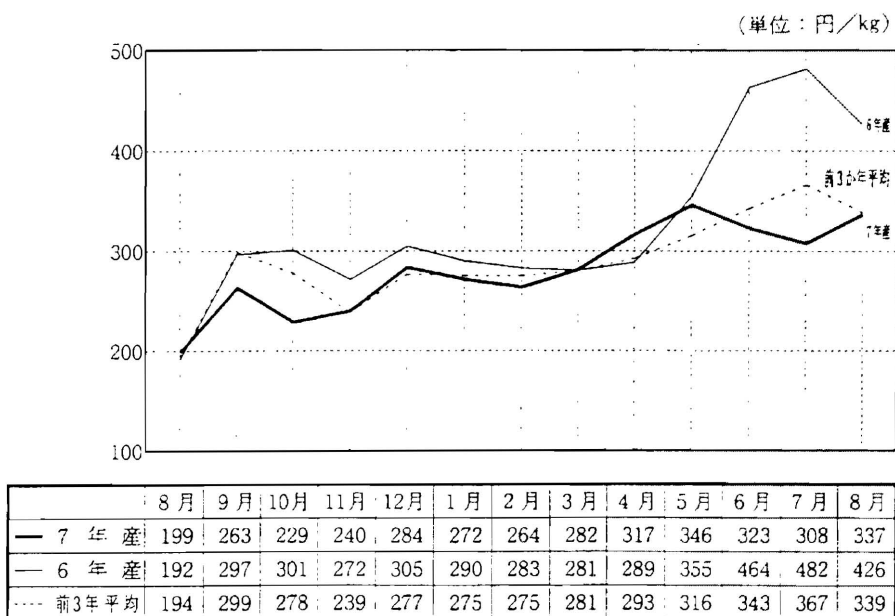


図2. 月別市場平均価格の推移

ふじの価格は内部褐変の発生により低迷した。市場平均価格はキロ当たり288円（前年比90％、前3カ年比98％）となった（図2）。

加工用原料の集荷量は、外国産りんご果汁の輸入がこれまでで最大となり、県産果汁への受注が少なくなったことにより加工原料の需要が減少したため、前年を下回る85,604 t（前年比95％）となった。果汁用原料価格は、品質が良かったことから前年を大幅に上回るキロ当たり35円（前年比159％）となった。

以上のように平成7年産りんごの生産と販売の状況は、収穫量は前年の干ばつの影響により前年を下回る量となった。価格では、景気の低迷により高値が望めないことや、入荷増による価格の低迷もあって伸び悩んだ。特にふじでは、収穫期の気温が高かったことや、「硬度が低い」、「蜜入りが多い」などが原因となって内部褐変がみられた。青森県の出荷の特徴は、他県産のりんごが集

中する9～12月を避け、価格が上昇する3月以降に集中する。出荷の時期をずらすには、長期の鮮度保持ができるCA貯蔵に頼ることになる。消費者に良品質で旬の味を常に供給できる適正な貯蔵管理が必要である。加工については、外国産りんご果汁の輸入が増え、厳しい状況になっている。そのため、原料の品質の維持と、安定的に原料を供給できる体制づくりが必要である。

### 3. 外国産りんご及びりんご果汁の輸入状況と課題

この章では、外国産りんご及びりんご果汁の輸入状況を基に、現在の課題と今後の対策を考察することを目的とする（表1、2）。

表1. 年次別・国別りんご輸入実績

(単位: t、円/kg)

年	北 朝 鮮		韓 国		ニュージーランド		ア メ リ カ		合 計	
	数量	価格	数量	価格	数量	価格	数量	価格	数量	価格
46			13						13	
47			180						180	
48			65	87					65	87
49									406	33
50	1,150		45						1,195	30
51	20		62						82	100
52									-	-
53									-	-
54	514	53							514	53
55									-	-
56									-	-
57									-	-
58									-	-
59									-	-
60									-	-
61			18	129					18	129
62									-	-
63									-	-
元									-	-
2									-	-
3			14	437					14	437
4			69	359					69	359
5			37	156					37	156
6			7	100	235	333			242	326
7			170	163	190	187	8,935	164	9,295	164

価格はC I F 価格（港渡しで関税を含まない価格）

日本への生果りんごの輸入は、ガットにより昭和46（1971）年に自由化されており、北朝鮮・韓国から断続的に少量輸入されたことはあるが、世界的な主産国である欧米や旧ソビエト連邦、中国等からの輸入は植物防疫法により禁止されてきた。しかし、平成5年にニュージーランド、平成6年に世界有数の生産量を誇るアメリカ産りんごが輸入解禁となった。

ニュージーランドからは、平成5年に6品種の輸入が解禁され、6年には235.1 t、7年には190.01 t 輸入された。ニュージーランド産りんごは、県産りんごの長期貯蔵品と流通時期が重なるものの、輸入数量が県産りんごの5月以降の県外出荷数量に対して比率が非常に少ないこと、小売

価格も県産りんごに比べて大幅に安い状況ではなかったこと、市場関係者の評価が芳しくなかったことなどから県産りんごへ及ぼす影響は極めて少なかった。

アメリカからは、6年12月に77kg初輸入されたのを皮切りに、7年5月までに9,124 tが輸入された。アメリカ産りんごの売れ行きは、販売当初はマスコミが大々的に取り上げたこと、消費者の関心が高かったことなどから好調であった。しかし、輸入品種のレッドデリシャスとゴールドデリシャスは日本では消費が減衰した品種であることや、国産りんごと比較して品質面で劣っていたほか、一部に残留農薬が検出されるなど、県産りんごへの影響はそれほど大きくなかったと思われる。輸入2年目の7年産については、市場関係者や消費者の評価が悪く荷動きが鈍かったことや、県産りんごよりも大幅には安くなかったことなどから、12月から4月までの数量は1,071 tに止まった。

りんご果汁の輸入については、平成元年は1.5万kℓ程度であったが、輸入自由化後の平成2年は前年比2.9倍の4.3万kℓと急増した。平成3年は品質面、4年は輸入価格の高騰で輸入量は減少したものの、5年以降は外国産りんごの豊作や円高等により輸入量は増大しており、平成7年は前年比で27%増の7.5万kℓで過去最高の輸入量となった。また、輸入果汁を生果換算すると、66.6万t程度と推測され、本県生産量の8.5万tを大きく上回る膨大な量となっている。

表2. 果汁輸入状況

(単位: 千ℓ、円/ℓ、%)

暦 年	60	元	2	3	4	5	6	7	8(1~11月)		前年同期比	
									数 量	C I F	数 量	C I F
合 計	35	67	111	116	130	149	220	233	209	245	97	133
オ レ ン ジ	15	21	29	36	56	61	106	81	79	216	102	124
ぶ ど う	4	7	8	12	10	12	14	15	16	268	115	119
レモン・ライム	4	8	10	4	5	6	6	8	6	291	80	134
グレープフルーツ	5	11	12	9	14	13	15	15	19	196	138	98
り ん ご	—	15	43	37	32	45	59	75	61	279	92	151

生果りんごについては、県産りんごへの影響はそれほどものではなかった。しかし、ニュージーランド産りんごでは、県産りんごの長期貯蔵品と流通時期が重なること、季節が反対で「もぎたて」のものが輸入されていること、また、アメリカ産りんごでは、収穫時期を遅らせて味をのせてから輸出していること、ワックス処理をしないことなど、日本の流通業界や消費者を意識して品種等を改善してきていることから今後とも国内の流通業界や消費者の反応を十分注視する必要がある。特にアメリカでは、わが国を視野において、「ふじ」を増産しているほか、品種も向上してきていることから楽観視できない状況にあることを認識しなければならない。

りんご果汁については、国産果汁は輸入果汁に比べて混濁果汁の品質が優れていることから従来需要は堅調であったが、輸入果汁との価格差があること、混濁果汁と清澄果汁に対する消費者の嗜

好が変化していく可能性もあることから、今後は高品質果汁の生産、コストダウンに一層努めていくことが重要である。

#### 4. おわりに

このように、県産りんごも国際化時代に突入しようとしていることから世界で最も優れた品質を維持するために、これまで以上に生産・流通両面にわたる産地体制の整備に努めていく必要がある。

りんごの販売については、国際化や国内での産地間競争に打ち勝つための販売戦略の確立が必要である。消費者に良品質で旬の味を常に供給できる適正な貯蔵管理と消費地市場との的確な情報交換による計画出荷を徹底することが重要である。

また、りんご果汁については、一定量の計画的な加工仕向けの徹底が必要である。外国産果汁の輸入急増により、厳しい状況となっている現在では、集荷・選果段階で品質に応じて原料を安定的に供給できる体制づくりが必要である。

最後に本論文作成にあたって多大なご指導と助言を賜りました後藤雄二先生に深くお礼を申し上げます。また、資料を提供して頂いた青森県りんご課の方々に対しても厚く御礼申し上げます。

#### 【参考文献】

高木 禎（1984）：青森りんごの販売組織と市場対応、弘大地理、21， 1～26.

青森県農林部りんご課（1997）：「平成8年産りんご流通対策要項」125ページ.